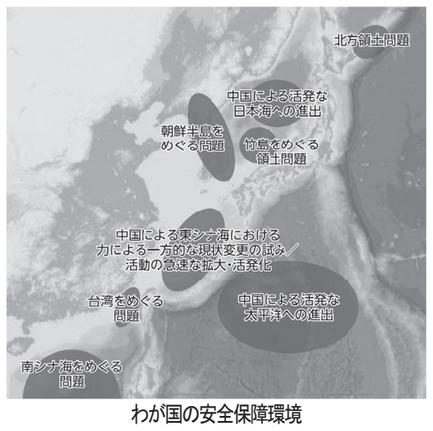
令和6年版防衛白書の概要

防衛省は7月12日、令和6年版防衛白書を公表しました。以下、その特色を令和5年版と比較して概観しました。

戦後最も厳しく複雑な安全保障環境に直面

特色の第1は、わが国を取り巻く安全保障環境です。

令和6年版では「わが国は戦後最も厳しく複雑な安全保障環境に直面している。ロシアによるウクライナ侵略により、国際秩序を形作るルールの根幹がいとも簡単に破られた。同様の深刻な事態が、将来、インド太平洋地域、とりわけ東アジアにおいて発生する可能性は排除されない。国際社会では、インド太平洋地域を中心に、歴史的なパワーバランスの変化が生じている」と記載しています。令和4年12月に策定された「国家安全保障戦略」に記載された「わが国は戦後最も厳しく複雑な安全保障環境に直面」しているとの認識が、引き続き継承され、防衛力の抜本的強化の必要性を訴えるものとなっています。



わが国の安全保障環境

わが国の防衛力、抑止力を順調に強化

特色の第2は、木原稔防衛大臣が、巻頭において「特に、防衛力の抜本的強化の進捗、すなわち、わが国の防衛力、抑止力が順調に強化されている様について、丁寧に説明するよう努めた」と述べているように、防衛力の抜本強化についての記述です。

令和5年版では第Ⅱ部の「わが国の安全保障・防衛政策」において、第2章「国家安全保障戦略」、第3章「国家防衛戦略」、第4章「防衛力整備計画など」として、令和4年12月に閣議決定された「安全保障戦略3文書を詳しく説明していましたが、令和6年版は、同じ第Ⅱ部の「わが国の安全保障・防衛政策」において、第2章「国家安全保障戦略」と「『三文書』」としてまとめて記載し、第3章では「防衛力整備と予算」と章をおこして「令和6年度の防衛力整備」を記載しています。

そして、その中では「令和6年度における防衛力整備計画対象経費と『補完する取組』にかかる経費の合計額は、総額8・9兆円と国家安全保障戦略策定時（令和4年度）のGDPとの比較では、約1・6%になっている」としています。

また「防衛力強化のための財源確保」との表題を設け「抜本的に強化される防衛力は将来にわたって維持・強化していかねばならず、これを安定的に支えるため、裏付けとなるしっかりとした財源が必要となる」として、防衛力強化資金については「令和5年6月に『防衛財源確保法』が成立した」こと、また税制措置については「令和5年度税制改正大綱において、法人税、所得税、たばこ税につき複数年かけて段階的に措置を講ずる」として「令和9年度において1兆円強を確保する」とされたことも記載しています。

さらに「令和5年度以降に実施する事業などの進捗管理を徹底し、防衛省・自衛隊が一丸となり、予算を効果的かつ効率的に執行していくため、令和5年4月、防衛大臣のもとに「防衛力抜本的強化実現推進本部」を立ち上げ、令和6年4月までに計6回、推進本部会議を実施したとしています。

同志国などとの連携強化

特色の第3は、同志国との連携に関する記載です。

令和5年版も第Ⅲ部「防衛目標を実現するための3つのアプローチ」において「同志国などとの連携」を記載していましたが、令和6年版では同じ表題において「日米同盟を重要な基軸と位置づけつつ、地域の特性や各国の事情を考慮したうえで、多角的・多層的な防衛協力・交流を積極的に推進していく」として、その記載を49頁から69頁に増やしています。

また、新たに「女性・平和・安全保障（WPS※）進に向けた取組」との表題を設け防衛省のWSPへの取り組みを説明しています。

この中で「防衛省・自衛隊はこれまでも国内で女性活躍推進のためのさまざまな取り組みを進めるとともに、PKOや大規模災害対応に取り組む主体として、WPSの観点を踏まえ、内外の活動を推進してきた。方で、防衛省・自衛隊の全体を見れば、隊員一人一人にWPSの認識や、ジェンダー視点を政策の企画・立案に反映させるとの意義が浸透していないという課題があった。こうした課題も踏まえ、全自衛隊員の意識改革や国際的な連携の取組をさらに強化するため、令和5年にPS国際連携調整官（令和6年4月以降、WPS国際連携企画官に名称変更）を指名するとともに、防衛大臣政務官を本部長とする防衛省WPS推進本部を設置した」としています。

さらに、第Ⅳ部「共通基盤の強化」の第3章「訓練・演習に関する諸施策」において「同志国などとの多国間訓練」について、その記載内容を大幅に増やしています。防衛省として、同志国などとの連携の強化に力を入れていることを強くアピールする記述となっています。

HA／DRに関する能力構築支援（ラオス）において実施した自衛官によるWPSセミナー（2023年12月）

防衛省の誇る専門家の分析を記載

特色の第4は「視点」というコラムを新たに設け、防衛研究所の研究者が、研究者個人の立場からより学術的な観点での分析を述べている点です。具体的には「連携を強める中国軍とロシア軍（理論研究部の飯田将史部長）」「イスラエル・パレスチナ武装勢力間の衝突（アジア・アフリカ研究室の西野正巳主任研究官）」「抑止力の意義（防衛政策研究室の高橋杉雄室長）」などが掲載されています。

◇　◇

※WPS（Women, Peace and Security）とは、紛争、災害などの発生時に、より脆弱な立場に置かれる女性、女児などを、特に保護すべき対象であるとして、女性、女児などの保護・救済に取り組みつつ、女性が指導的・主体的に、紛争の予防、復興および平和構築、ならびに防災、災害対応や復興のあらゆる段階に参加することで、より持続的な平和に資することができるという考え方をいう。

（写真および図表は、いずれも令和6年版防衛白書から）

表紙は刀鍛冶

その他、例年その特色が現れる表紙ですが、今年は「『刀鍛冶』をコンセプトとしています。防衛省・自衛隊は発足以来『刀を抜かないために』必死で刀を鍛えてきました。すなわち、抑止力となる刀を鍛え上げ、わが国に対する武力侵攻を未然に防いできました。自衛隊発足70周年の節目にあたり、国家安全保障戦略などを踏まえ、わが国の防衛力、抑止力が順調に強化されている様と、今後もたゆまぬ努力を続ける決意を表現しています」としています。

防衛省・自衛隊の不適切事案に係る防衛大臣から隊員へのメッセージ

本日、防衛省における特定秘密に関する事案、海上自衛隊における不正な手当の受給や不正喫食といった服務事案、そして、内部部局幹部職員によるパワー・ハラスメント事案について、公表するとともに、関係者に対する処分を行いました。

また現在、潜水艦修理契約に関し、隊員の規律違反や、契約の適正性に対する疑いが生じており、特別防衛監察を実施しています。早急に調査を進め、判明した事実関係に基づき、厳正に対処します。

「信なくば立たず」という言葉があります。防衛省・自衛隊の活動は、国民の信頼あってのものです。多くの隊員の皆さんや、その先輩方によるこれまでの真摯な仕事振りを通じて、防衛省・自衛隊の国民からの信頼は積み上がってきました。その結果、国民の9割が自衛隊を信頼している、とも言われています。しかしながら、一部の隊員による、これら一連の事案によって、その信頼を裏切るものとなってしまいました。今回公表した事案の性質は多岐にわたっていますが、根源的には共通する部分もあります。

私はこの機会に、皆さんに問いかけたいと思います。

「あなたは、守るべきルールを正しく理解していますか。分かっているつもりではありませんか」

「また、周りの雰囲気に流されて、悪いとわかっていながら、これぐらいは大丈夫だろうと思ってはいませんか」

「または、問題が起こっている現場を見て見ぬ振りをしてはいませんか」

「そういった自分自身の振る舞いを、あなたの家族や愛する人に誇ることはできますか」

木原防衛大臣

防衛省・自衛隊は人の組織であり、隊員一人一人の高い使命感がなければ、国防という、崇高で困難な任務を全うすることはできません。われわれは、立場や任務はそれぞれ違いますが、みな等しく「防衛省・自衛隊」という大きな看板を背負っています。今一度、われわれ一人一人の行動が正しいか、そして、働きやすい職場環境となっているか、そういったことに思いを致し、国民の信頼を取り戻すため、全力で取り組んでいきましょう。

昨年9月に防衛大臣に就任した際、私は皆さんに、これから積極的に現場に足を運び、皆さん隊員の要望を真摯に受け止め、そして改革していくことをお約束しました。実際にさまざまな基地や駐屯地を訪れ、厳しい環境で働く皆さんと直接接し、皆さんの真剣な眼差し、そして、任務に臨む真摯なその姿を見て、厳しい現場で働く隊員こそが自衛隊の、そして日本国の宝であると確信をいたしました。私はいかなる時も皆さん隊員と共にあり続けます。今回の事案を私も一緒になって真剣に受け止め、そして私は先頭に立って、信頼回復に取り組んでいく覚悟です。どうか皆さんにおかれても、改めて気を引き締め、共に職務に当たっていきましょう。

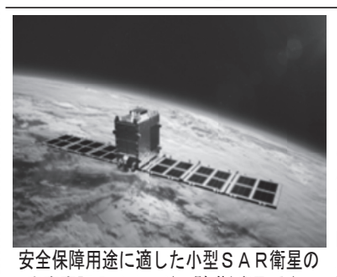
令和6年7月12日
防衛大臣　木原　稔

小型SAR（合成開口レーダ）衛星の宇宙実証に向けた打ち上げ成功

防衛省は8月3日、小型SAR（合成開口レーダ）衛星の宇宙実証に向けた打ち上げが成功したと発表しました。

防衛省によると「安全保障用途に適した小型SAR衛星の宇宙実証について、契約事業者による小型SAR衛星の打ち上げが成功した。この小型SAR衛星は、防衛省によるわが国防衛の観点からの各種所要を満たす画像を適時適切に取得できるよう、その機能を向上させたもの。宇宙領域を活用した情報収集については、わが国周辺国等の意思と能力を常時継続的かつ正確に把握していくために極めて重要で、引き続き、民間事業者等とも連携し、安全保障のための宇宙システム利用の抜本的拡大（宇宙からの安全保障）に取り組んでまいります」としています。

この契約業者とは、株式会社Synspective（シンスペクティブ）（代表取締役CEO・新井元行）で、同社によると今回の衛星は「新たに傾斜軌道へ投入され、この軌道を選択することで、低・中緯度地域の人口密集域に撮像リソースを集中させることができるため、需要の高い地域のより高頻度な撮像に対応することができる」としています。


安全保障用途に適した小型ＳＡＲ衛星の宇宙実証のイメージ（防衛省Web）

山形県での豪雨被害に伴う災害派遣

7月24日以降、東北地方の日本海側では大雨が続き、25日には山形県では線状降水帯が発生。大雨特別警報が発表される豪雨となりました。

これに伴い7月25日15時33分、吉村美栄子山形県知事から陸上自衛隊第6師団長（楠見晋一陸将）へ、酒田市での荒瀬川氾濫に伴う孤立住民の救助要請が、また、26日0時26分には最上川氾濫に伴う孤立住民の救助要請がありました。

このため第6師団は、第20普通科連隊（連隊長・武田宜則1等陸佐）を中心とした約500人態勢および回転翼機等による人命救助活動を行いました。

7月30日14時20分、山形県知事からの撤収要請を受け、活動は終了しました。

救助活動中の隊員（防衛省Web）

国内外情勢（2024年8月）

◇習主席、国境防衛力の強化指示（8月1日）

中国人民解放軍創設97年を迎え、習近平国家主席は領海、領空の防衛力強化を指示しました。科学技術を活用し国境警備の現代化を求め、東・南シナ海での中国の海洋活動が活発化する可能性があります。

◇ハリス氏の指名確定（8月2日）

米民主党のハリソン委員長は2日、ハリス副大統領が11月の大統領選に向けた党の候補指名を確定させたと発表しました。代議員のオンライン投票で、過半数の票を獲得。

◇米豪、対中国で連携強化（8月6日）

米国と豪州は6日、外務・防衛担当閣僚協議を開き、豪州北部や西部の空軍基地改修を共同で進めることに合意。中国の覇権主義的な動きを念頭に置いた連携強化が狙い。

◇南海トラフ、初の「巨大地震注意」（8月8日）

8日午後、日向灘が震源の地震が発生し、宮崎県日南市で震度6弱を観測。気象庁は南海トラフ地震の想定震源域で大規模地震の可能性が高まっていると発表しました。

◇中国初の大型ミサイル追跡艦が竣工（8月13日）

中国初の大型海上早期警戒艦「瞭望1号」が上海市長興島の江南造船所で竣工。全長255㍍の艦船は米軍などの動向を監視する機能を有しています。

◇岸田総理、退陣へ（8月14日）

岸田文雄総理は14日、9月の自民党総裁選に出馬しない意向を表明しました。自民党の派閥裏金事件を受け、党勢回復を目指しての決断。

◇北方領土元島民が洋上慰霊（8月20日）

北方領土の元島民らが20日、洋上から先祖を供養する「洋上慰霊」を実施。交流事業の中断に伴う形です。

◇中国軍機が日本領空を一時侵犯（8月26日）

26日午前、中国軍の情報収集機が長崎県沖の日本の領空に一時侵入し、空自機がスクランブル＝緊急発進して対応しました。中国軍機による日本の領空侵犯が確認されたのは初めて。防衛省は飛行の目的を分析、警戒・監視を継続。

米国事情　第54回

先月号で「バイデン氏は7月末頃までに選挙戦から撤退せざるを得ないのではないか」と書きました。案の定、原稿提出後の7月21日にバイデン氏は撤退を表明し、副大統領のカマラ・ハリス氏を後継に指名しました。米大統領選の状況は万華鏡のように目まぐるしく変転しています。9月に実施されるテレビ討論会が11月の大統領選を左右する試金石になるように思います。ハリス氏は元検察官という経歴からトランプ氏の多くの罪状を挙げて糾弾するでしょう。そして、老練なトランプ氏はハリス氏を副大統領として実績不足だと攻撃するのではないでしょうか。

どちらに軍配が上がるかは、米国民が判断することになります。でも、相手を攻撃するばかりでなく、世界の超大国として、どのように世界をリードしようとするのか、政策面でのディベートも大いに期待したいものです。

万次郎の仮墓

さて先々月号では、万次郎島に漂着して何とか5カ月間、生きながらえた話をしました。

運命の糸というものはどこかでつながっているものなのでしょうか。

捕鯨船ジョン・ハウランド号のイットフィールド船長が、たまたま鳥島という絶海の孤島に母船からボートを出して亀でも捕獲しようと考えなければ、万次郎たちを発見することはなかったでしょう。船長が鳥島を通り過ぎてしまっていたら、万次郎らは日米交流の歴史に登場することもなく、島の土になっていたことでしょう。

私は、この人と人の邂逅、出会いというものに驚嘆します。同時には、赤い糸というわけではありませんが、人知の及ばないところで、万次郎と船長を結びつける何かが存在しているのではないか、と考えてしまいます。私も思いがけない場所と時刻に、しばらく会っていない旧友や恩師にばったり会ったことがあります。読者の皆さんもおそらく同じような経験をされた方も多いと思います。きっと誰かが天上から眺めていて引き合わせてくれているのではないかと思います。

ジョン万次郎の仮墓

ホイットフィールド船長の墓

門から入って左側の道を進むと、万次郎の恩人、ホイットフィールド船長のお墓があります。もし、船長が鳥島で万次郎一行を発見していなかったら、その後の万次郎は存在していないでしょう。さらに、船長がアメリカの東海岸北東部の港町、フェアヘブンに万次郎を連れて行かなかったら、万次郎らはハワイの地で生涯を終えていたかもしれません。私は、ここで両手を合わせ、日本人であるジョン万次郎を助け、教育を授けてくれたホイットフィールド船長をはじめ、フェアヘブンの人々に感謝の気持ちを捧げました。

概深い思いで、墓前に手を合わせました。

今から6年ほど前、私はフェアヘブンを訪問しました。

万次郎が暮らした家を見学し、ホイットフィールド船長のお墓参りもしてきました。リバーサイドという墓地です。この墓地の話も今後したいと思います。

ホイットフィールド船長のお墓と万次郎の仮墓の両方を見た人はそう多くないのではないでしょうか。

土佐の鯨漁

2つ目の発見は、土佐での鯨漁が土佐東側の室戸の漁師にしか許可されていなかったことです。このことが大いに万次郎を飛躍させたのではないかと想像します。

なぜ万次郎は捕鯨にこだわったのでしょうか。鯨は日本近海にもやって来ます。当然ながら、当時の日本でも鯨漁は太平洋岸の各地で行われていました。万次郎も中浜から漁に出て、鯨を捕獲していたのではないかと以前は想像していました。しかし、江戸時代の土佐藩では、室戸の漁師にだけ鯨の漁を許可していました。したがって、たどった航路を描いた世界地図（**右図**）を見ると、あの当時に世界の海、太平洋、インド洋、大西洋を万次郎は航海しています。そして、多くの寄港地を訪れて、彼は見聞を広めていきました。万次郎は15歳にして、すでに世界の海を縦横無尽に行き来していました。彼は当時の日本人の中で唯一、地球上での日本の立ち位置を、実体験から理解していた人物ではないかと思います。

資料館に掲示されている万次郎がたどった航路を描いた世界地図（**右図**）を見ると、あの当時に世界の海、太平洋、インド洋、大西洋を万次郎は航海しています。そして、多くの寄港地を訪れて、彼は見聞を広めていきました。万次郎は15歳にして、すでに世界の海を縦横無尽に行き来していました。彼は当時の日本人の中で唯一、地球上での日本の立ち位置を、実体験から理解していた人物ではないかと思います。

※著者ウェブサイト
isobekoichi.com
※著者X
@Isobe_koichi

ジョン万次郎の生地を訪ねる（その2）

前ハーバード大学上席研究員　磯部　晃一（元陸将）

足摺岬周辺の漁師は鯨が近くに来ても、獲りたくても獲れなかったそうです。万次郎は小さな船で港を出て、鯨漁を横目で見ながら、鰹や小魚を獲る漁をするしかなかったのです。

その万次郎を偶然にも救出してくれたのがアメリカの捕鯨船でした。日本の捕鯨船とは大きさも装備も全く異なり、当時の最新鋭の捕鯨船でした。併せて、乗組員には白人もいますが、捕鯨船の中では人種差別というものはありませんでした。技量や経験、資格で給料が公正に決められていました。

土佐ではかなわなかった鯨漁がアメリカでは自由にできることを知って、万次郎はさぞ驚いたことでしょう。さらに、肌の色が異なる乗組員は人種差別とは無縁で、一丸となって各々の持ち場に従い捕鯨にまい進する。そうした気風が万次郎の心を捉えました。そして、世界の海を、鯨を追い求めて、自由に航海するアメリカの捕鯨船に魅了されたのではないかと思います。